

## 在宅における疼痛コントロールへの薬剤師の関わり

嶋崎裕子、白石裕子、白石吉彦

【目的】当院は島にある唯一の有床医療機関である。患者背景や生活環境までを把握しやすい。また当院の全職員数は約 70 名と小規模であり、患者情報を共有しやすい為他職種間での連携をとりやすい。更に、一人の患者を外来・入院・退院後と継続してフォローしやすい環境である。今回入院時から退院後も関わり続けている癌術後患者の疼痛コントロールにおける薬剤師の関わりを報告する。

【症例】75 歳女性、独居。要支援 1。訪問薬剤指導 1 回/週、訪問看護 1 回/週。平成 17 年左乳癌発症し術後、点滴にて化学療法を行うが骨髄抑制のため TS-1 内服へ変更と同時にオキシコンチンの内服が開始される。薬剤師は疼痛コントロールに関与するためにオキシコンチンの内服開始時に介入した。

【結果】入院中に疼痛コントロールに関与するためにオキシコンチンの内服開始時に介入した事により、退院後も継続的に関わりが持てた。レスキューの使用頻度確認、オキシコンチンによる便秘などを確認する事により、また訪問看護との情報の交換により患者の様子を把握できた。

【結論】オキシコンチンの開始と同時に関わられた事で、退院後も信頼関係が築けた。今後もこの関係を維持していきたい。